シリーズ

私の森語り（もりかた）

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。

「豊かな緑を次世代へ」

2025ミス日本
みどりの大使
佐塚（さづか）　こころ

■自己紹介

みなさんこんにちは！

二〇二五ミス日本みどりの大使の佐塚こころです。一年間を通して全国各地で森林や林業について学び、その魅力や重要性を広く発信する活動を行っています。

みどりの大使は、自然と人、そして林業の世界をつなぐ架け橋として、森林の価値をわかりやすく伝える役割を担っています。

私は長野県出身で、幼い頃から緑豊かな山々に囲まれた環境で育ちました。小学生の時には「緑の少年団」に所属し、しいたけの駒うちや植樹などを通して自然と触れ合う喜びを学びました。これらの経験が、今の活動の礎となっています。

■活動内容

各地域で開催される森林イベントでは、全国の緑の少年団の子どもたちと交流する機会が多くあります。共に植樹や木工体験を行う中で次世代に森を受け継ぐ意識の芽生えを感じます。未来を担う子どもたちの真剣な表情に触れるたび、森を守り伝えていく活動の意義を改めて実感いたします。

緑の募金の呼びかけ活動で特に記憶に残るのは、四月から五月の「みどりの月間」に合わせて、総理大臣へ緑の羽根の着用をお願いしたことです。募金が森林整備や災害防止、環境保全に活かされていることを伝え、少しでも多くの方に、緑の募金について知ってほしいという気持ちで総理の前に立ちました。

緑の羽根をつけた石破総理(当時)とともに

また、式典や講演会での司会進行を務める際には、登壇者の方々による森林関係の講演を拝聴する機会もあり、森林政策や利活用、地域の課題の現状などを学ぶ貴重な機会となっています。司会という立場を超えて、自身の学びにもつながる時間です。

最も記憶に残っている出来事は活動の前半期に山梨県を訪れ、林業の「川上」から「川下」に至るまでを視察したことです。苗木が作られる前の種の段階から見学し、伐採、加工に至る一連の過程を通じて、一本の木が生活の中に活かされるまでには多くの人の手と年月が関わっていることを実感し感銘を受けました。特に、種から苗を育てる生産者の方々が「新しいことに挑戦するにはリスクが伴う。だからこそ、成功した時の喜びは大きい」という言葉でやりがいを表現していたことが印象に残りました。こうした実際に現場に携わっている方々の声を聞き、私もその一員となって発言をすることを心がけています。

私が最も力を入れた活動は、私の地元である長野県で盛んな「キノハナ」作りです。木のかんなくずを使って造花を制作するクラフトの資格（キノハナワークショップマイスター）も取得しました。見た目に美しいのはもちろん、木の香りやぬくもりをそのまま感じられる魅力があります。現在は「キノハナワークショップ」を各地で開催し、木の魅力を多くの方と共有しています。

■メッセージ

森林は、私たちの生活を支えるとともに、心も癒してくれる存在です。そして、その豊かさは日々の管理や保全に携わる多くの方々の努力によって守られています。これからも、自らの目で見て感じたことを丁寧に発信し、森の価値を多くの方々に伝えていきたいです。そして、この日本の豊かな森が次の世代へと受け継がれていくことを心から願っております。

■連絡先

一般社団法人ミス日本協会
〒一六〇-〇〇二三
東京都新宿区西新宿二-二-一
京王プラザホテル南館
九階

山梨県の林業視察での施設見学
林業の出発点にあたる苗木生産者の方から、種から苗木を育てるまでの作業の工程や出荷するまでの苦労などをうかがいました。
「新しいことに挑戦するにはリスクが伴う。だからこそ、成功した時の喜びは大きい」という言葉でやりがいを表現していたことがとても印象に残りました。

サッカーAC 長野パルセイロホーム会場での緑の募金活動
子どもたちと一緒に呼びかけを行い、多くの方が募金に応じてくださいました。
「緑の募金は何に使うのですか？」と聞かれた際に、子どもたちがしっかりと、「森を守るために使われます」と答えていたのはとても嬉しい場面でした。

キノハナワークショップでの一コマ
木のかんなくずから作られる「キノハナ」の作り方を学び、講師の資格となる「キノハナワークショップマイスター」を取得して初めて教えた時の様子です。
作り方のコツをうまく伝えるだけでなく、子どもたちを楽しませることを最優先して進めました。みんな笑顔で取り組んでいました。

茨城県緑の少年団のみなさんと記念撮影！
私もかつては「緑の少年団」で活動していました。

みどりの大使の佐塚さんは、3月に中部局を訪問、4月下旬に「1日中信森林管理署長」として、上高地の開山祭に参加されました（中部の森林 252･253 号及び各地からの便り参照）。全国各地を訪問し、緑の大切さを発信する様子は、林野庁が発行する情報誌「林野」に紹介されています。
情報誌「林野」はこちら →